帝鑑圖説

五

自九巻至十巻

内閣文庫		
番號	和	36295
冊數	6	(5)
函號	子253	10

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

帝鑑圖説巻第九目録

遊畋失位	夏の太康
脯林酒池	夏乃桀王
革嚢射天	商乃武乙
妲己害政	商の紂王
八駿巡遊	周乃穆王
戯挙烽火	周乃幽王
遣使求仙	秦乃始皇
阬儒焚書	秦の始皇
大営宮室	秦乃始皇

婬巫出入

漢の武帝

帝鑑圖説巻第九

遊畋失位

夏乃太康と申て御門一人にましますが位にのぼり
そのかみより猟をこのみ遊ども王業をばとゞめたまひて天
下のまつりごとも邪しきまであけてもくれても山野
のかりにあそび猟をたのしみ男を歩りしてかれ
人をの兒として、みやこをはなれ河南と申ところに
あそびれをせさ猟遊びて百日はあまりにかりねまでども
かへらず、こ事もおしうぬがゆへに群臣に君百
官姓乃さんらくはいろなく朝廷乃まつりごとをも
これをそうしありさ海ありさそ又身之れ津とめや

してあしくよたがゐしられけりしくさきりたとへの
なめに事欲に御しあく好をはくさとや道とも太康
無道の君なれば国家の民の亡げきれりとおそ
れみ好ふ事もなしけれども人〻その教をわきまへ
なれども民のたちよそふ〻あるしなく又穀のこの為
事をなし殺よ無〻百姓さき〻をとらう兄弟てまつり
なげきかなしむありさま中〻をお好うかぎりなや
かくてこのころ西に后羿とまうして一人のしよこうありけ
くむみおりふ御うあつうめしの我が君や無道
於一世にすく逸山野のかりに身を御川し天下の
まつりごともなくさそて又国家の無く〻なれなげき

かなしむありさまをみてもありとかんじけり
しよせんこの河表をふさぎてびやこへいれじとて
はたもれ数十騎のぐしなてんでみゆ〻をひき
なりう洛水のほとりへまちいてくわんぎよをふせ
ぎさへぎりけるあひだ太康はさうなく標中へかへ
りおはしまさでたちまちまち天下をうし
なひて陽夏といふところへかなしくおちゆき
はかなくむなしくなりたまふその後おとうとなる人あり
しがゆくことみなあれはかなしみながひよみがへろ
御うしなひされどもやがて大禹天下に聖人のすれ
君とえそ国家をおさめ給ふ事このかはれをそろ

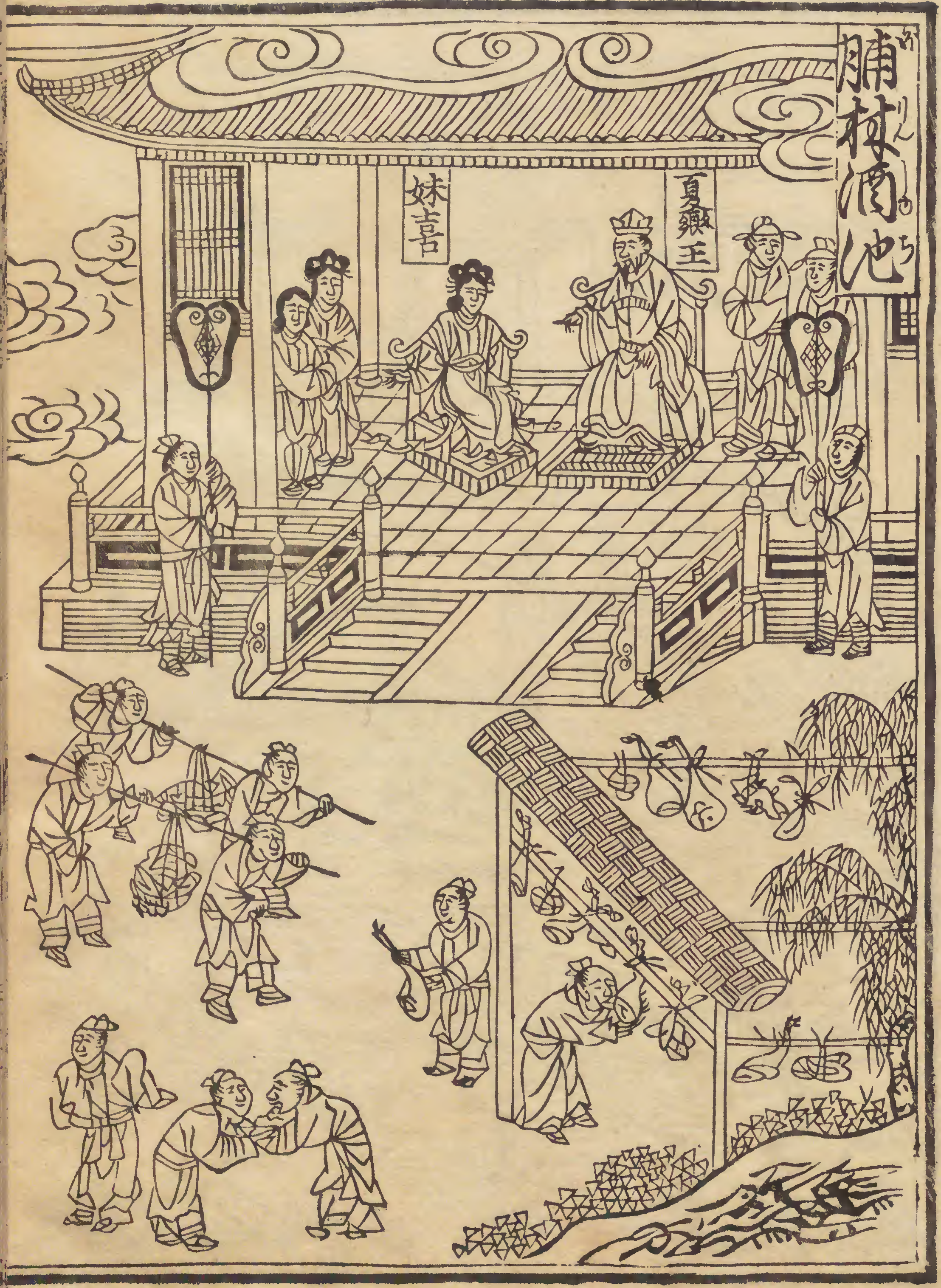
こゝをかうが聖人にまさりがちく王啓は代々
いくほどまて太康はうちとうたきまつりてんう太平に
おりしかども太康はいさみて遊かりに田かせらし
あひて王職をぞおこたりへかるかりむ羅んかりこと洛汭
とそ百姓うらみをいだくまにうやう政の事へあるか
ありとてうらみけるなり

脯林酒池

夏乃桀王と申てはべりし一人おはしますげぶさう事一
ふしてまつりごとを志たがひつどひおうとゆ
有施氏の国をとらんとて美人一人えらみ給ふその
名を妹喜と申しける妹喜てうあいのさうらふぞ極よ
よろづ妹喜のおほせにしたがひ一事もさうらひ給ひて給ふ
乃うてあはれてしたまひかなりさぶらひぐさまり
我とらせ給ふゆへ、みな百姓乃ざいほうをとりひそ
のみならず、あまたのちからを以つ井を掘り又桀王
うとよりは酒をそのみぎはへをきしひまにして
ちくおいてうふい乃にくをあり、めぐく山乃ことくふ

はじまれるをむしてかぢしやめしめけめのなそれさ
あるへ夜あそびふを御しのあそくめり又地をほすり
いけをほり酒を入あ水とめし則ふねを浮うべたゞ
なりゑうをもとめていくミと飛しみのなかき事
千里ありおよぶありて一よびいぐみをうけあへばと
まくしていけのかとうありあいまりうゝうだいをかくさ
むけ池の酒をのむものは酒ことに手の水をのむが
ごとし其のかず三千人也とや桀王と妹喜と此よし
をみ悦じてよろこびあふもうりもめしてあけ
てもとられあるをかしきをのみその志を也しして
天下のまつりごとの地ゝあるる事中をお猿りなすり

とうやそれ桀王といふもの人へ禹王の志そんなりけるに
禹王天子乃くらゐにありしかどもやかたも宮殿をもつくりや
しやうはくし里又衣裳をもおきよそうにしてものいぐさを
もちのミおほくせんどはともて天下乃太平なりしなりけりの
をさめりひとつのあるりおもくに儀狄といひしものよく
酒をはじめてつくりて儀狄さけをもちいて禹王にさゝぐ
め志つくだ禹王そのさけをあまかいなげいておほしめし
後人さだめてこれより後代に儀狄かさけそんじたべき
ものなりとのたまひて其のさけをのまでかならず国を
みだすものあるべきとふかく遠ざけ不ける人うの儀狄
をことさらにいましめてをはりけれて二度ちかづけまたりけり



桀王それしそんなりといへども禹王乃年して
そむきけりくわほうにおごりほしいまゝにゆへ天下
をほろぼせり其後六百餘年をへてより殷乃紂王と
申せし人かの桀王乃ごとく酒を入ていけとなし
うをはくことをさまへてあいらにおごり給ふ
ゆへ殷乃天下をうしなへりあくをとりわなる時は
酒はあれわざはひのもとなりつゝしみてさけをのむ人は
これをかゞ見とすべきなり

革嚢射天

殷乃武乙と申して帝王一人おはしましけるが、ことに無道
にして天道をうやまひ給はず。或時武乙木を
きりて人形をつくり、これを天神となづけ
てんたうと號し、ひようし給へり。武乙其天神と博
をして、ばくちをうち給ふ。されてんじんまけて隙
をする事あまたゝび、いかんとしてかくのごとくさかしき
そむきし人をおり、殷のみひて天神乃ずいをとさせ給ふ
故に天神淺くろうとなく、とかくちちてんじんをうち
そうなりけ天道をとくへも傷よによりて皮をもつて
ふくろをぬひ、うちふくろのうちに血を入ておく

こうにかけてころげおつる號をばほうらくとなづけて
いよいよおごられしを紂天と名付け給ひて天道をはなれ
のまれびとより御そうにこゝろおかりましくて
よりもなし五年とやらゆる河瀬といふところへかり
ありぞさ殿のふ時みてらにいかづちありて天地を
おどろかせしかバ武王あれはあおと給き給ひてはふれ
むありしをありけるふそれ天下の君主ある人は天をおそれや
まふ給ひつておそれひありやせうかの御か様人よ詩に
いはくあれをおそれまじやまふ天あれ思ひ
伐あつりてめいひとつやとぞやといへりもし天道
をおそれざるはまうありそ給ひし武王てあく

ぎやくぶどうにして人をおそれも天道をおそれや
うを天地をはぐくまれも紂天をあまも海とともにはすゝを天
にもとてよろづにとこ給ひしいかづちあちまち
くだりて紂王に武王をかゝりせうこれてんかの
いけ事あからの意ある意あり

国立公文書館
National Archives of Japan

妲己害殺

商の紂王と申すてんか一の御門ありける時殺方
のぐんひやうをかりよせして有蘇氏の国をせめ給ふ
有蘇氏きこえは戦ひにはあそまでもおちわち妲己や
せし美人一人ありし事を紂王へ参てまいらせて
に降参申す紂王の御びきんをえそなのめならずに
めしてちやうあいのあまりかゝる殺みよろの
衣裳みゝるまで妲己のこのみまゝにてあるべき
御つにかぎりなく妲己のあくぎやくをおこして殺給ふ
又楽官師延やうがのにおほせられ朝歌北鄙のうたを
うたはせ北里のまひをまなばせ靡々のおんがくをな

さて妲己はすぐさま紂王の又鹿台の一座をはじめ
たくみをめして宮室をかざり玉石をもつて作らせ
そのいたきハまたちりばめしあまたの宝ざいをつミかさね
とりこめられたのしミをきはめかぎりなきゆへに鹿
台のうへ金銀みち錦繍れうりんよりさうらうしたがひ
ふりきのあまりやうちをはじめてりくミとし酒
を入ていけとなしてちくりんにてうぶいのめぐるをかけ
あたりにひなたりやまゝのおどし蝦蚖をそぞうに
して其あひだをさらしう斬ありての文蠆に九れ
取よらちにさそ従来の人にまじりてあがひへり
まいをいをなさしれりあひて淫えんとりて

しもたんゆうびやうれうのさまゆふべにはじまり
ぬる迄をもすこしもわけなんとさる時はしるしもなくいやまし
あかりぬかりかなり猛獣百性なげゝれば讒者も
君にそむきさてまた妲己は雲をさくりと則や
まうらん者も我が君紂王の淫度が為としてりは
ざりのうちさきゆへなりとや狭しうぞ紂王をく
思召御をとりいくえしちとしあぶらをぬりてくれ
かけ下にすみ火をおこしけりすなはちかのあかりの
造をかのはかぐ孫の罪人をあとよりおひ
かけ後し火気をはさしぬうしてそこらあめく
わぶらむなげうまそてなめらかなりといかんぜしてつあゆ

むかしゆうちまうり火中に落入てやけしにけりとなり
またゐんの妲己が世に乃しりよりもおろかなる事ハ限もなし
かくのごとくびしきいましめを名つけて炮烙乃刑と云
それ商乃紂王ハ聞ゆる人乃事にあるてとかやく其
罪さとりさいらう人にあらざれあり殺りよしてさしく賢
人を追付てさめをさゝし殺されぞらく我の代を
ありひまくにしてあくぎやく無道をしるふる其数
いりでつみねるし鄂侯をしてひしかのり比干
もじをなされうくはちうしんをもろしたりけるハ
せいきうびあふ梁に府乃あとぞのこりぞれ
天下をたもちしものゝあくはくしむにしもくハなし

八駿巡遊

周乃穆王といふみかど一人おはしけるかに造父
といふ臣下ありよく車を御する事妙にして世に
ならびなかりしかば穆王驥馬を八疋もとめたまひて
をかまち造父をぎよしやとしてこゝろにまかせて西
乃方にはるぐ〳〵とやうりうなされ後かへるべき道を
ひさしく瑶池にあそびてゆさんをなし人
らん事をもとめられ諸侯朝廷にまいりおこた
をされて天下の心もそむきけるに徐乃方より徐
偃といふものあり穆王久しくゆうらんして帰
らせ給はねの城をせめとらんと思ひける、

すなはちむほんをおこしてみづから徐偃王となり
て其いきほひおほいなりしかば周の諸侯おほく
徐偃王にしたがひつきて穆王を見すてたてまつる
それ穆王のはじめくらゐにつき給ひし時は天下
太平におさまりて英明の主君たりしものゝ造父を
もちひてゆうらんにふけり給ふ故へつねにおこたり
おこたられて周家の王業おとろへて遂に世をみだし
天下の君よく／＼つゝしみたまふべき事とかや

戯挙烽火

周の幽王と申て御門一人ましましけり褒姒といひし美人ありけるにてうあひかぎりなしされども褒姒はあへてゑみをふくむ事なかりし程に幽王いかんともして褒姒に一たびゑみを發てたのしまんと思ふ事のみをおぼしめされて様々とはかりして褒姒をよろこばしめんとしたまへども更にゑまざりけりしかれどもそれより先に幽王國に凡諸侯すでに参らしめて約をしてうけふてきをおそれありてひんびやうの事あらば懐上にまちありてたてよりと烽火をあぐべきよしさだめをかれしにはなはだしかり

なびけしていろけしやうへあいまりてされいり
ミかど波やとうくりい毎く志ゆくなりあ時
幽王褒姒がよろこひを見まほしかりん事をこがれて
あることみなん乃時へうたりもおちち烽火をあげ
給ふあくれ諸侯とをちのより城見ろよりもちちや
ミやこにむかんありとそびやうどもをひきゐ
はせまゐれおくれじといそぎきたりがそくじにミや
こへいたりねまさなん乃志さいをもなかりければ
褒姒がよろこひを見たまりんがあまとうやり給く
乃諸侯たちこここゆへあきよむおしくミやこへあい
まりきやびたりさんきまいやりやとそみやく

あかるきふよろひきまなりあれようこのかくご園乃
諸侯たち幽王をきんじよまつを志を大戒きでに
むかんとくてたてく幽王とせめきたるぞ幽王烽火
をあげて諸侯をまねき城まもらのふゐく乃諸侯たち
あのよしを見るよりもきまびよねもられたるゆゑ
りの褒姒にたとふれてまうそさまあんがふゐなる
ためしきよせんまいつてあ見もかしとそひとりも
きまらぬのもかし故よ幽王ためにため大戒よりかるが
されて驪山と申ところにふてむかしくありせのひ
くり此時褒姒をいけどうまて大戒がよにごとき
まうあくなりいて見るとき家れ天下れ君なのろへ

されは昔より女色をとほざけて国をたもちけるためし多く
うしなひし女色によりて国をほろぼしたるもおほし
中にも周の幽王は政をおさめず故に幽王
も褒姒によりて天下をみだし身をほろぼし
国をうしなひ給ひけり

遣使求仙

秦の始皇帝とてみかど一人おはします不老不死の
くすりをもとめ給はりんとて仙境をたづね給へり
きこゆる海中に蓬莱方丈瀛洲とて三つの山あ
りけり此山にて仙人のすむと聞給ひ始皇帝
かの山へいらん事を願ひおぼして秦の方海上を見
ぐり給ふところに斉の国より方士徐福といふもの
まいりて始皇の不死のくすりをもとめたまふよしを
承りおよびて始皇をあざむいていふやう海中をみ
れば上に蓬莱方丈瀛洲の三つの山あるを見たりま
ぢかく見れば波にかくれその山へいたる事はかなはず

ともはるか海上にあつて一の山あり常に仙をる
よくしえさらめやありて長生不死乃くすり
ありともめさらんやありしめさだとしまうき男女
などそのかずよろづの徳志よく人をえらみはけ
てたまひですなはちかの山へいこさそ不死乃薬を
もとめえて毎てまいらんやと奏しけれバ始皇徐市が
いひまかせゆめゆめしろしめされずあやしはい
小男女三千人そのほかよろづの徳志よく人を徐市に
そへさづけ給ひてあおくれふねばかりよがして海上に
うかべけく不死乃くすりとりにめさつかはし給ふ徐市は
あまたの人をひきゐて海上をわたりけくあくるの

志海りしこの山乃ありところれらをそくしめて早帆
もちそこ乃王とあり不死乃くすりをもとむる事ハ
さそあさぬおりひれまのくろり始皇をたぶらかして
はかりごとやらんへうなゝざりそれ秦乃始皇ハ六國乃王
をたいらげて天下一とうにしたがひてよろづあつかひ
にかかりぞとりふ事かしこくりやかや猶おさ乃
まくにえがたきをれそいのちおほく摂よ方士うたと
をほめこゝろくして不死のくすりをもとめ給ふ事
ゆこゝとふそれぞらなくんや後漢の武帝にいたり
多く方士をはかりして蓬萊山にも海の中その安期生
やといひし仙人をもとめ給ふといへとはゞかなかなへ

げにとうやゆきとふ不死のくすりとやらんえこそ
しれ蓬莱にありありあらくはかりく後世の人か
あらぞ方士はちかつけて秦也海よりそ浪にうかゝれ

坑儒焚書

秦乃始皇帝くらゐにそなはり給ひてより三十四年
とやしに李斯といふ臣下ありよく始皇の心に
かなひけるを始皇李斯がそうもんにまかせて
ことごとく天下乃四書五経其外百家の書物を
あつめてのこらずこれをやきすてさせ醫書と卜
筮乃書のみのこしたまひけりもし天下に書物を
かくしをくものあらば則とらへてきびしくつみにおこなふ
ことあらび天下に書物をよむことをゆるさずしてかく
かくりんをさんせいしたのふ儒者四百人とらへ
て詩と書とをよむものありしをことごとくあなにうづみけり

はく市にて出給し人めよろこびしむかひたりけり又
いにしへの事をいひ紀商代わたせそしゆをのあれどもぬら
まちとらはれて君にそうそんやのりをしさかしと〻
げりたそその勇も世をよりしおかしやがて小松とあそは
されに侯生盧生とて二人の儒者のありしが始
皇れぶたりふまーしくて仁儀をそむきたりしを
はなくそしりそしりけり又二人のよしをしや
わかりひかりけれはさしくかくて位をしりいでさぶ
めくとゞふ松こなとふるかしりくてそかなかしまし
とそいけくともなく勇をかくしてあとをひそめて
いてきゆりげ始皇のよしきこしめし松やきゝよりつ

ら儒者ひてあかう儒のうかりいまつの二人はそのとくもく
はまにきんかの紀に仁儀文学のみちをとも紀人乃心を波
よろしせりきよせんりまつらとさかゑてちうしまんあり
きつそ知しとてあちまちに御史をはちこの儒者せんひく
りの二人乃儒者をとらへいだしていかしくせめさ
せ給ふゆへ儒者をそしりしものしやどもも又たりひ
みその者をあらそ儒者のともに上その数四百六十余
人ともやみかくされをとらゑてふ咸陽といふ所よ
あつさふかなまなでにせ川くかの四百六十余人乃土
をいかなりけ此阿房人ねとしいれてみなりける
くだされけれどもいにしへよりの帝王天下をたもつに

おさめ給ひしかバまづ世もしづまりけるとび仁儀(じんぎ)
乃みちはおとろへしまゝしだいに秦乃始皇(しくわう)
ひとへに仁儀のみちをうしなひむかしよりの書物(しよもつ)をやき
はくしそのほかをあげてかぞふべからずかゆへ
に秦(しん)の天下もほどなくほろびてそのちに漢(かん)の
天下はじまりて高祖(かうそ)宣帝(せんてい)魯(ろ)王(わう)とともに
太宗(たいそう)の代になりて孔子(こうし)の廟(べう)をまつり書をあらため又
またば文帝(ぶんてい)の代(よ)はいふにおよばず書(しよ)の儒(じゆ)をえらびて又武帝(ぶてい)の
代(よ)におよんで六経(りくけい)をあらためてきたりしかに武帝
公孫弘(こうそんこう)といひし儒者(じゆしや)董仲舒(とうちうじよ)乃まんようなもさをうけて
おほく天下にぐくりんをひろめ後ハ孝(かう)経(きやう)孔子(こうし)の

をしたまふまでび天下かりけんあうそれ秦(しん)の天
下乃おこりずなと漢(かん)乃てんうのさかん比なとふあく
おもひてしらるべきなり

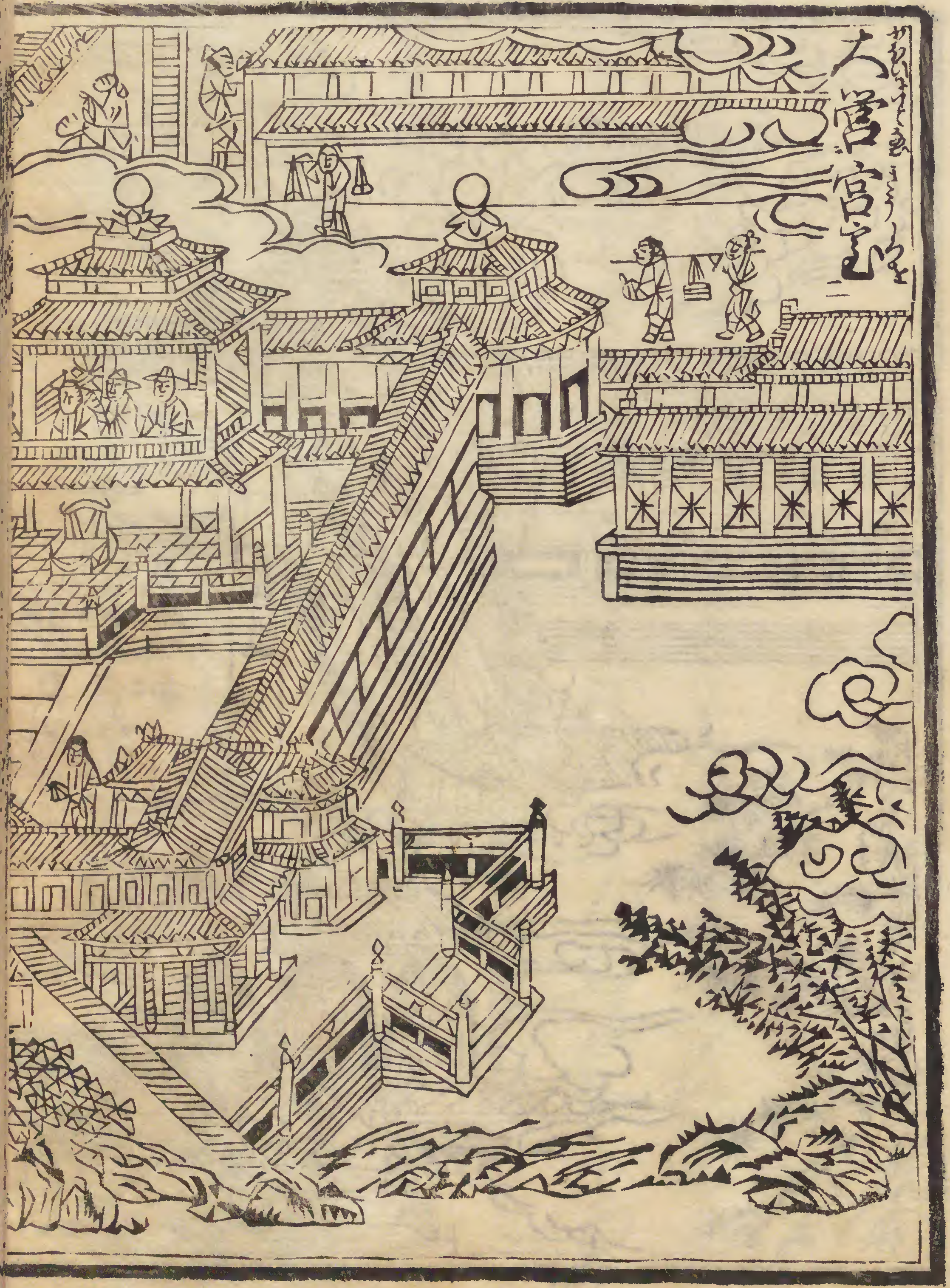
阬儒焚書
秦始皇
李斯

大営宮室

秦の始皇帝のとき咸陽といふ所にみやこをたて
諸侯をほろぼし給ふたびにせんずいよりの宮殿をうつし
きたりとおびたゞしくなりし渭南上林苑と云所に
宮をいとなみひろくして殿およそ一座の宮をあて
給ふ是を名付て阿房宮といふなりその宮殿さし
もろもろのへいみしてひがしよりにしへいくつまで
よこにひろさ又五百歩あり又南より北までいさゝ里
なかへて又十丈かうやうみみえ一万の人をならべ
又あはそ五丈のはたをさしたるは海へとゞく
宮殿のすぐれたる事なるは城あるにたとへなし又

東西南北へくしまはりづゝはかり閣道をもて殿下より
まつすぐ南山まではく里ばかりしつらひ南山の
いたゞきをひやうして闕門をたてたかき楼の閣
のごとくして二ぢうにつくりをかけすぐに渭水
わたりひとつ大河をうけとをし咸陽宮まではく里ばかり
つくりの上のりきうてんのかずは三百所たてならべ
ゑのうちきうでんのうちはいともとうけともしやうを
まつらしびんれいごうぐをそろへよりそれ美人をあつめ
めて宮中にこそあそび鐘鼓の遊興をなしたはむれ
それおほんこれむかしより帝王をとゝのへ
速に極人をごうにあみのちうりなつけやうを

よつかりの始皇帝天下ぢんさんのちちうりなつけ
後はかくはかりまうといふ宮殿をいとなみてぜい
をつくしてあつめ我が身ひとりのたのしみとせ故に
ぢんさん君をもて見しく項羽のむかしにかへるすゑ
かり始皇帝の項羽がためにころされて宮
殿も焼きされ天下のきこえ古き人のかくれ
ともあるべきをとくよみなり


大営宮室

女巫出入

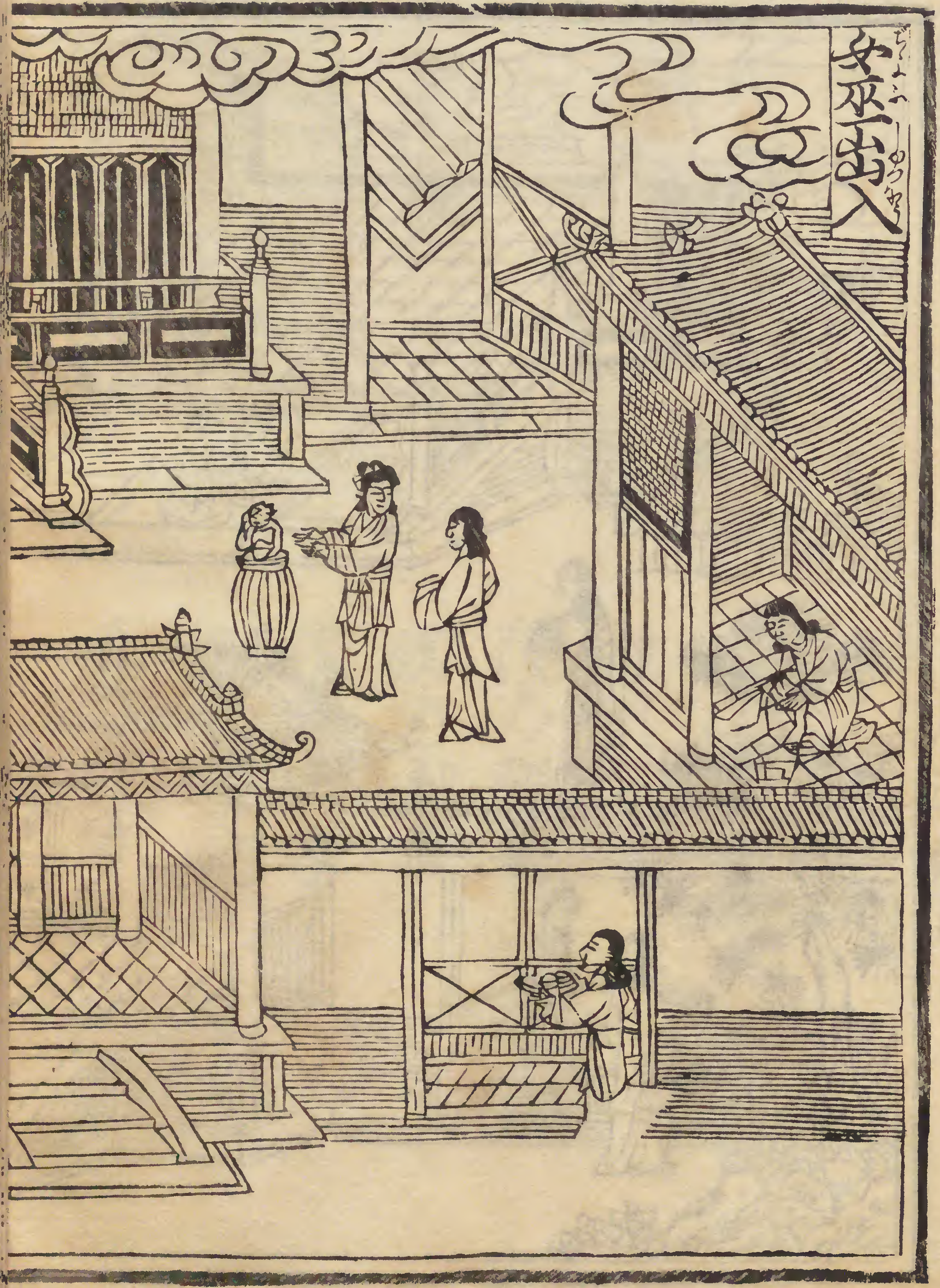
漢の武帝と申て御門一人ましますがこの時天下に
みこかんなぎされなくひおほくあつまりて禁中へ
まうで宮中のきさきたちにまじはりよく
祈誓のまそてもろ〳〵人のわざはひをまぬかれしめ
あるひは人をちやうぶくして我が身のあさなをおろ
かしこき室をとく被しろそいりきをきさらちものみこ
此それのまじなひて我が身れさたりをさけなをり
あるひは君のてうあいをあらそふてまじひり孫
なくある人もりのみこ戒めのことをもちやうぶく
志なりとなり御かのみみこ木をとこみざみ人かたをほり

これを庭のうちにかくしおきてこれをまつりて
よく人をちやうぶくせしをあらはさき君にてうあひを
ゆるさざらしめて奉りひに孫とみありしかどいかにもりは
おまへて武帝かりしはけて云これくるうハみこを
たのみ奉りきけらこて人かくるをはくうりあれを地中に
うづみ君をちやうぶくをとや致しろぞ武帝付よし
きこしめし物かきまいうり世をきらひ給くあまりこれ
佐をあらし給ふそうの河に武帝おほ敷乃ゆめあり
本てきさこみまうるん形数千とうり杖をもち
きたりてこれをうはんとすらんしてよりほぞふおん
毎いふあんふして御まひ乃ゆかにふし給ふあくに

江充とて一人乃臣下ありこの海に武帝乃太子に
江充を次く悪まるを故に江充思ひけるやうこそそれに
ちかぢ君武帝へいく給とかく流としなかせ給ふゆへ
のしも此かしをおりきまいらすたいしくはつあるりは
給ふ悠しさおうんよおいてそれがしはおそに太子
にくきよし極へちうせんまんそうさがひなし
ちよせんとく此ふび武帝と太子乃ゆれをふあん
よいとしやさんとてもゆれをちいりて武帝へ
そうもん申たりけれハ悪けれにふづらく致
給ふ事をあれみこ乃まさまざおりて武帝是を
御こいく物りあされるんもおりち江充にあわ致

つけらせて蠱をみてそこへいくろしをいれば世
間に又宮中の地中をほりてかのまてこゝろざさみなる人
形あるをとりてかけ孫を接ひきて江充やまいらせん
それより太子の宮へいりて地中をた
ゞちにほりておほくのれいをかりいだし
先もとよりいろ〳〵の君は太子にちやうがくしたまふと
見えより武帝は江充がいかりければゆめ〳〵しらず
思されざりしてはしもありやとおもひしめに太子は
あくるまで世をひろき太子ちのよしさしめしたまひ
宮中をゆくたびにちく乃ふかきやうをとうじむかしや
はくだやしきつかんとそいふべくおそくはせつら

都へとらへ人をはやく武帝のためにあくまでとくわかるあり
太子おもひしにめされなくてはかりのさいふりけるを
みかは江充がきらひてあてかりきらば江充はあらして
まさかりんとうなるとげんしてあちこちのくゞをりよね
きくへとでけし一せんにはちきとるぞはやよは江充を
いけどりて則ちろさう為すべしひろびりの武帝このよし聞
きこしめしていよ〳〵いかりをなして世をひ
きゝたる時いしし太子むかんをかも宮中に川でうかり
いうぞ太子をとらへめしまとなりしかし太子北中に
ひそかにきこしめし湖県とぞいふ所へ逃
みちゆきかのふかがくてうしさよりはなれしてきん



なる事と思召れつらなりたちこゝにめぐらしくびをふりて
はなはだむかしの氣ありて仏にいれりとこゝろねがひて
あれこれみこの事をわざとありし武帝はじめよりこれを
きこしめしせいしよをもたせられけるへこゝろよりも心をよびの
いそぎてはおもひすごすとりよろこびける太子を
ゆるし給へり其後武帝太子の心がけの思をもとろくし
めされて天下をまかせなされ給ふをこゝろにおもひて
うらみぬ事なれどもうしろ見とてなんのたよりかなし
おのれまたかへりて心遣ありて見ることだにさへなかりけり

帝鑑圖説巻第九終

帝鑑圖説巻第十目録

五侯擅權　漢乃成帝
市里微行　漢乃成帝
寵昵飛燕　漢の成帝
嬖佞戮賢　漢乃哀帝
十侍亂政　漢乃桓帝
西邸鬻爵　漢の靈帝
列肆後宮　漢乃靈帝
芳林營建　魏乃明帝
羊車遊宴　晋の武帝

英祖倹德

宋乃列聖

帝鑑圖説巻第十

五侯擅權

漢乃成帝と申て外戚一人内しまをがはじめて政徳おほせ給ふ時のちくかされ此一門みな王うじ乃人々をよびつぎさ疎給ひていづれ是をうらみんにあげ給ふまげられある兄なる王鳳と申せしをまづ大司馬になされまあげ給ひて大将軍となされよろづ天下のまつりごとをバ王鳳ひとりまつり扱給へりそのおり王譚王商王立王根王逢時なりの五人などおなじ日にまんで侯乃くらゐに封し給ひ故に時乃人此の五人を名づけて五侯と申せしとかやそのうちにて此五

人王くわんりあけ給ふ時よりこれさなる旁なるひじ
なりあれをいつくにとあげぬるは成帝のすゑなるに
そなはり給ひてより一門の人々をあさしく思ひ
いかし高宮よあけていせひよおごり給ふ粧人天乃
あれをいましめ給ふ事あさらかなりしかども成
帝の清あく給ふそくくとんさとり海しおさめ其
譚文王商王根こ乃二人すなはち王鳳をりけひく
天下のまつりごとをはかさどりていせひをおごるな
かつ給ひもなしけれど親御一門まうじれ人々今と
うさまとないへぞきりしおごりあるひとく事をゆるく
おりかる國々にかゞりてまれおもくらし中納ご給

そのおよそ二十五人とうやそのかみの諸官人時の
いせいにおそれけく二十五人の一門へ栄もくくと
いでいり賊宝をさゝげて四方より走るたゆる
ひまもなかりなかりまうじれ人々きずひふ
いせひをあらそふて栄花をのぼなさいとしやそ
あるひはおなかきさり家をならべてさまへとこゆそあ
あるひは赤墀をならして連墳をなしてひろかの禁中の
てひをまなびつ又園乃うちに八山をつきそて
ながさそ河さかをでんしれ白虎殿をひらうせり
又長安城乃墻をむつきものみより濃水乃ちさ
ひ池を掘がなれうちはいさらしめて其なかたちこれを

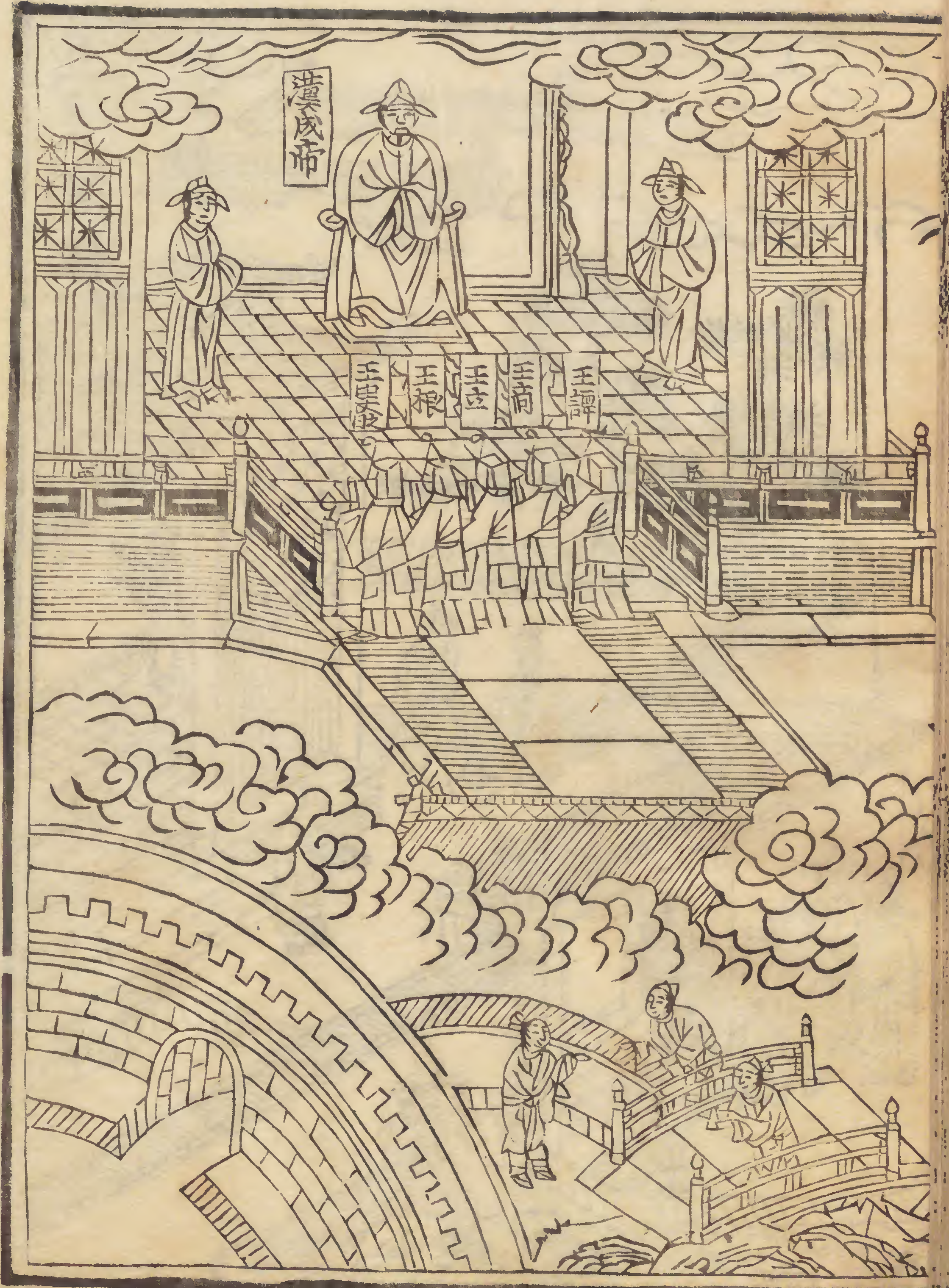
いけとなせりそれおごる事かく乃ごとしあくど
うくちよくせんばんいげ迄も上書して君を誅して
はやくはんりやうじのくにみちいせひをおさく
めんみしてきいぐ王におごまり猶さくおか座う
乃事をきんぜい志給へしとかや成帝の
御時すゝしをみしいれおし海さどこれみよ川て
まうじ乃くにあらはよくこゝ得をかしひまく
みしみおそれいぐう家の要しき成帝は御子なり
平帝とかせしあり御くらゐつきみ御子へどうも
いまのごよう世うに海しますゆへ御一門乃ゆかりがら
に王莽といひしものひやりい世ひよおごりてつね

もろ天下乃まつりごとをほしいまゝにおこなひしかども
天下をみな王莽が手にをさめつり故よ王莽はつゐに平
帝をしいし奉りて漢の天下をうばひとり
みづから天子にそなはりまつりごとは天下乃君をなすのみさ
人もその一門乃ともがらみな金銀をあたへてふの
こゝろざしをむすび天下をまつりごとにあまねくも
あはれ一ぞくにきうらを渡りけるその王莽が
御からだにいたりてまたくだつていはるまでわざはひのがるゝこと
あるべき事ならし

国立公文書館
National Archives of Japan

市里微行

漢の成帝のみかどは禁中をしのびいでゝありきゆうらんをこのみしまゝに事どものこと給へりひそかにしのびいでゝ給ふにさそ天子たる事を人にしらせまじきと様へかへり衣よれてぐるうをまとめしきわざとて又百官公家の御さきをくたしいやしき下人をめしつれ給ひてありしを見て小車にめし又ある時はまた下人みうちあるじ里などしてあるひは馬にのりけれてあるひは市にいりてあそびあるひは野原をいづくちかをすぐさめ又たまゝとく鄰家のさとにいりて雑談ことらもしあるをきらせく歓じてゆうらく



せき后ひろりあくに張放と申て一人の臣下あり
くらゐは富平侯にてちやうぜんまで君にてうあひきやう
くわ事よにならびなしきんかありかなかゆへに
成帝かうちとあつかめさはなうへてましませし張
放が下人ありとけ後ひて天子ならというふ事なきに
ありくりしま後のひとりそれ張放も門てうあひ
ならびなしきんかなれどもさぶめて張放か下人なり
といへバ人をもおそれはなはだしさとおごりめされて
かくぞなのら後ひとりそれおごんされど天子も
うらみもいはとして切りそめ宮中をいで後ふかく
ぜんでまちいどうの人をつれ車のゆみ和鸞にもらぶなを付

鳴珮のせいはなはだしうを後のふと成帝はことにゆかう
そのみなをうつしめてあつけえいちへいぶめくあそび
ありひも殿下よゆうらんしてそぞろ張放が下
人となのら後のふ事まして海しまするせん然ものぞ
きちをほめへ後ふかり中をさうかりとりや後の
とそもいつぞの天下は乱しして万歳はたがじこ
多かりけんや

市里微行（しりびかう）
漢成帝

寵姫飛燕

漢乃成帝けるときみかど禁中をしのびいでさせ
給ひて陽阿公主乃家へいらせ給ふ御つれ公主乃御
うちにはよろづの器をととのへおかれ女房あり其なか
ともがらおほかりしなかにひとりすぐれたる者あり
めれとぶかしくおもひかへりみ其名をとへば飛燕
ときこえければ成帝かの飛燕を御覧じて御心うつり
よろこびましましてそれよりめしつれかへりて
宮中へいれ給ふ飛燕をてうあひ有しも事なれ
ならびなかりけり又飛燕がいもうとに合徳とて
せいありよにかくれなき美人なり成帝此をもめさる

めされて又此合德をめしておなしく宮中へいれし
給へりあるに披香殿乃博士に淖方成といふ者あり
これひろきりのちりより方成ある時成帝乃にうし
給ひ侍さそひたてまつりていふやうはしが飛燕合德
あの二人の女子を見たてまつりしもすなはちあく禍の水
ふしてうるひのあたへくだされたことの二人は女子也
君にはさめしりんまてつひあり故よ滅びうべきにしてやし
まことにそれ漢乃天下は代々火とくをえて天子
乃くらゐをつぐしるしあり此乃海よ此二人乃女子を宮
中へ入給ふ事うたがひなく天下をうしなふもとゐなりしあの二
人乃女子をわざはひ乃水となづけまうしけるを此八

うらぞ火乃とくをかろがもへつまなうさゞひあり
とぞやがりこは兄弟乃女子君乃てうあひをとうく后
なりいまたいくほどなかりしに二人ともに婕妤乃
くらゐになし給へりしかるに兄弟乃ものの思ひよう
みそいかにもしてかん后は許后宮をざんそうして
君にうしとま奏せなしかばされしくこれきたれよそあ
そら後ささとたりひいく成帝おむかひてやしろう
めくはこゝとに許后宮たぼくしく我がみことをちやう
ふくしてれろたを殺ぎまふとうけあさらるやら殃しう
そ成帝あの事をいりりとしうちろしゆるされもなせ
許りめやと皇后をおさりし許后をうしとまゐせあまりいく

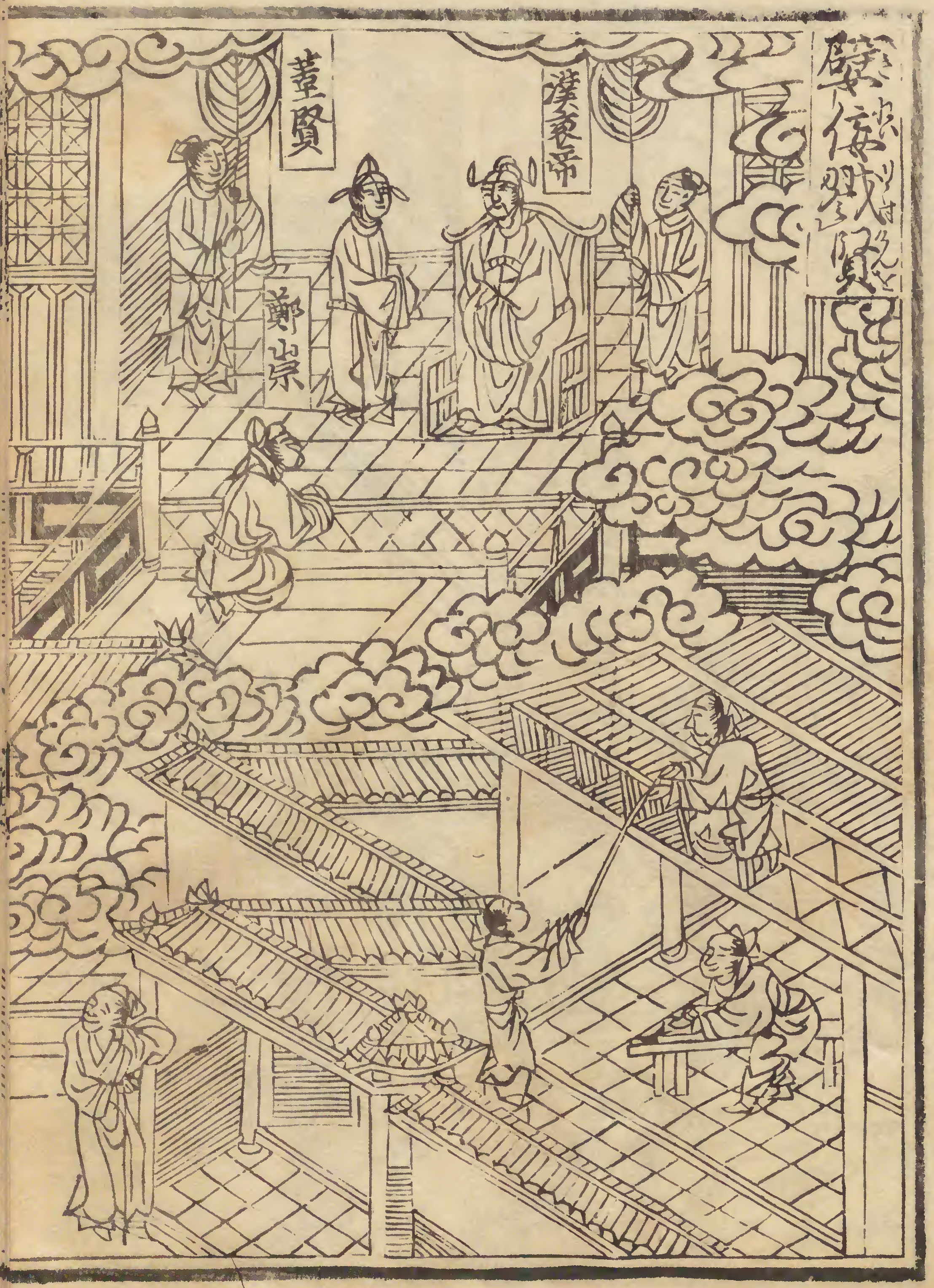
宮中にかきまぎらかして昭陽宮へうつしおき
ほどなく飛燕を一のきさきにそなへ給ふ故よつて
にはかにとくおもひ姉妹天下のまつりごとをみだれ
たりければたちまちみなればいにしへよりいまにいたる迄
國をかたぶけし天下をうしなひ給ふ事一つにあらず
されどもすべて一女色をおもむくこれ位をうし
なふもとひなりし漢の成帝もいやしき飛燕が色
賊をはれてうあひのあまりにや后よそほひへ給ふ事
むかし夏の桀王の妹喜をあいし又殷の紂王の妲
己をあひして天下をうしなひ給ふがごとし漢の天
下の物となる事成帝よりもはじまれり

嬖倖董賢

漢の哀帝と申て御門一人おはしましけり御そばに侍中の
官に董賢と申少年の美男ありそのかほかたちなる
やさしうしてよにならびなかりしかば御かどてう
あいふかくして常に御座をならべおきふし
ひとつに志き給ふある時董賢がいせひさすよに
ならびおはしまし御手に御門董賢が袖をしきて
えさせおどろかさじとおぼしめしすなはちせんしにて袖をき
られたまひてあまりれおんじやうをあはれみけるも
ちようあいに後をいとおしませうぶよろびの
読ちよく人にいつはりまで見ればめいみそむうじとて

いくらばかりのえあしを里をり又たはくらゐをりわざ後
まことによろづのごとくありけるひは金ざんのうはを
そのあまされ候ひとりそろへて董賢が家へを
くり給へりそのほかとのゐのかりの臣下に鄭崇とかやせし
ありしものゝ董賢をはてゝあひまじくてか
座うにゆうまとせ給ふ御ふ孫そこもいうか御事ぞ
と君をいさめまゐらせしかどおぼしめさるゝせ給ひ
てかへつて鄭崇をからめとり獄へ入させたまひけり
あはれなるかな鄭崇ついにそのかんごくにてむなしくなりて
久しく忠義の者のおもひとしてあとまで給ふを
はかれしもの彼らもむなしくなりにけりそれ哀帝

御くらゐありける世給ふころまめりい天下のまつり
ごとはきゝうみ人もよくそのみちをまなびて明
君といふべき道給ひしかども佞人をいさめ董賢を
てうあいし侮りまず後へはあまりにもあひけく君
徳をくらまし給へり


嬖倖戮賢
漢哀帝
董賢
鄭崇

十侍乱政

漢の桓帝として一人の御門ありしのち中官より
封ぜらるゝもの五人あり左悺具瑗徐璜唐衡單超此
五人ともに侯にぞなされたりしかれば五侯と
申ありこのたびぬけみかど官位をうりいよ〳〵志ゐ
ゐり彼よかの五侯死りの後もくときぬ又十人を
さしげてそらゐ後毎のものずと云ひて君此より後
御後見して政をあつかふ五人のほかに高郷侯にぞなされ
たり又小黄門乃そのほか小封ぜらるゝ者八人ありし
が是れも金銀をさしあげて位を争ふものぞと志
かじ列侯八人ともに郷侯のくらゐをあげ給まゐり

このときかの五侯は人々これおそらずといせひよ
おごりて天下のまつりごとをほしいまゝにせし
てかり牧よ四方乃あまゝけめ侯は人にそむかじさそて
これもくはまいかいをさしげてあやらへはかりえ
かゝりこのときてんかはんこんのうちぞはこ
左悺を名づけて左回天とぞいひけるこのあゝ侯て
左悺がいせひは天子のおんをうごかさんとものぐら
さんゆゑ左悺がこゝろひ次第とうや又具瑗をば具
独坐とあづかりこ乃むねその位のたかきゆへよの人
おそれはゞかりてさらにちかづくものなかりし又徐璜
をば徐臥虎となりけ偶公て其いせひをとゞせし

ふしたる虎のごとくにて人ゝおぢおぢてはゞかりにけり
かくのごとし又唐衡をば唐両堕とぞいひけり
うそはかりごと我がいせひのおごりて東といふ人ぞ西
やりむ両といはで楽やしふまりと云中緒どもも人
はかりにあらそひのどよろいむひ乃まくえりせりこれを
さそおさぬさそて又左悺が兄弟その郎等一族どもに
いろいろ遠きこうりふ官位をとりしひまゝにしてあらひ
ね一國は方伯とありてもあるひは一郡の太守と
なり人をあはれみなくいせひおごりゆくまゝ
あいをむさぼり法度をみだりて天下の人をくる
しめやまことにこれを盗賊とおとしさかりなり

無く百性もやかしく人みはげさりてこれをくと
ぬしをみなせうまの後中常侍乃官よ曹節王甫趙忠張讓
これらの人々又うのの侯ふおはあそ天下れまつり
おとにわりしひまくにおとあひてきがひすり同意を
たてゝ我よそむものをあれむくらめぐ獄へぞ入に
なりて又桓帝乃きんかふ竇武陳蕃李膺とて此三人の
ものたちも世よなすらびうた賢人なりおよあうく光を
う孫を川くちの三人の賢人おあしく一あい百餘人
ますそなんれゆへもおかりしにあとしくもうちこ
ろしてなのましくかいせひ丹おぞりて一天四海を
みだしなりいおさいくさくれどを痛げりしに董卓

やといひしものまでふむかんとたうしけるゆゑ桓帝を
おかしそまつりて漢の天下我がものせうそれ天
下れまゝさきの人をほろぼしやなちろづけて侯
者をとらくとれをさけて甚くるゆゑ久しうして天下も
太平にあさまぼえいすし漢乃桓帝を殺いしやれ
おごりをきんぜけれ故人をそてりらんげきおこり
ほく天下みだれしなひほろふとうや

十侍乱政
漢桓帝

西邸鬻爵

漢の霊帝と申てみかど一人御しましが西園のうち
にあたて一ツの邸舎をたて市の店屋のごとくに
官位をうらせ給へり官位に大小の次第あり故に
官位のねは文銭の多少あり二千石の官位なれば銭二
千万にうりはらひ四百石の官位なれば銭四百万にて
うり給ふさて又ざしきのうちの位ばかりの官とて
も然れども銭をおさめざればせしをぞうち雑まじへて
なさしめり又一縣一郡をうりなどによき所をぞ
たからもしき地をぞやまもくうまりかなるがゆへ
にさまざまの者も一度に銭をとりて出家もち官に

のぞみ又まど志づきさゑの、まづ官にのぼりけり後
みて一倍乃利をえてのちに銭をおさめてまいる又
ひそかにただ有れ人はおもく用られて公卿の位をうるまと
称ふ公卿ハあれ大官あり公乃官位をは銭千万貴卿乃
官も五百万りのぞうりまでかうして官位をうる者へ
ふ其銭をえだまとじく売あつめて西園乃内まさうを
急ておかわちおさめ称ゐりそもく霊帝れうゐう
みなんをうらせのみひて銭をたくはへ称ふる乃狂へ
をらもしくあづかるふ霊帝はじめいやしき侯れ位
たくおもせしと沢にまりて海どしき見おもうくて
そのうらうし沢のまゐれ去まりどいり流くてゐり

従り擁のふやうら色どらも桓帝乃時と死すうしも金銀
をたくはへ色なりを欲してぞいちうれ多犯事をとゞう
めし色おぞりしめされて於よ官んをうり銭をあつめ
称へうそれ朝廷乃官位をよく賢哉をえらびてみだ
りにせんにわざ色うしぞ備へて尚書まいらもくせん
れぞ私恥におよびさらぞ爵をとぞ悪徳におよびまどなり
なすられ任意人よあらん。だるが故ようぞきとひとりき
う官せいちんや官をうりて銭をたくはへ給ふ事
ぞりけく為にわらぞそれ天子も天下をたなごころにおさ
めまつりおとをおぼしうき給ひぐあれ金銀ツりハ成
さら為し給ひに銭をきらへ人てよのきんにまよひ

さふするゆゑハ朝廷乃名器をやぶりしを八百姓乃
うれへ乃こゑせり役よりまうさず寺もせざりしに
天下物おひふぬる人ハどもそこざれかゝしをあり
志かれりでう位をたもちゐしはかな位をとうし
あひ又西園乃ちうりしくう人のかね錢などをみな
ちりくにありしかたうてしてりいてありけり
あれ大学まとなりかあく一人さんましうれず一
國らんをおこるとらかふ什かりんさんにあとくすらぞ

列録後宮

漢の元帝乃時に后妃あまたおほし其後宮乃うち
毛延寿をはじめしよくのたくみのものをてんなれ
たぐひなき小ゆきうさ彩色あちなきめしつき絵ひて枝てん
なへいかゞくいちまちありてあやぶきと乃ようういをせ
せしありさ婕妤まかだ捜まふ又ひそうに人をてん
なれうち人ゆうそされうれ是乃うちまその状ゆゑみ
我が人のとあうそひてそんうをとさ勝て尤給へり
あれ後ことりいちまちあそあさびとの恃うそふ
もやうにあくあらむや元帝又御衣をあしくあまさ
ぎとれていりさ婕妤きう人待くまゆへ宮女をめし

つれなくして酒うる市へさらでまじへてはさうら
ゆられ李のしきしやうをとゞろかしけりとうやなよ呉帝
乃と紀奸人邪騒れ人おかしおごりあまりゆゑ
天災をいろまをなぶしだんらんも君をとうりきて
まつりてまざうひ美をしくおとろへなりきたりといふ
ども賢人はちかづけて国のまつりごとはせきを疎たる
く酒くぐあけくれ宮中より遊楽してやしきあまさ
人のていをまなび羊狗乃かんむしまをもちやう路窮
ふれらせ無ひりしげうこり河は我とりやぶれ
あらいしゆうをすゝめされて我ところ緩をかりしひまく
よ志たすあまりう凌がゆへなりだんらんとかめをとおそ

是を以て人おかし世なりあやりて漢乃天下おさうひ
なりあれ呉帝れ河ミれが乱にとく終

列肆後宮
漢靈帝

芳林営建

魏乃明帝と申す御門一人おはしましが此ころ為に
清ら楼閣ひてよりおもひきた宮殿をつくら楼閣りん
也数り給はれてもおちち許昌宮をつくり又洛陽
宮をよそで給ふ故に天下だんじゆう又姓より
いにしへまで数年やまをまうひまをおし又秦漢乃代よ
り長安城の中におかれし鐘簴銅槖駝又銅翁
露盤よりようう造のことぞ洛陽へうつされけり然る
に銅人をうつしてはこびきたる人乃ことごとく然りて是を翁仲
と名づけ司馬門のかたはらにぞおきたまふ又銅人を
もつて黄龍と鳳凰をいそてまたれを御殿乃まへにおきさ

給へり又一座乃土山を芳林園乃中にきづかせ給ふ
きみ御みづからじやうせん事をおぼしめされて
公卿の官人おそくらゐ高き紀臣下をもことごとく
いざさ御手をひいてつちをもちこぞせたまひ山
されどもなくじやうもちはこばれたる地わくの草木をあつめ
あつめの山にうへ又とりけだものをとらへてあの
山乃中へはなし給ふこれもおなじ時の山に
なかりしど御めぐに高堂隆衛覬董尋らの三人それをいさめ
さめやさんとてすかりいさめる書をたてまつりて
まつりけるか明帝用ひ給はずしかれともさこそはいらだちに
おごり給ふ事はなはだやむ事なかりけるに

天下だんらんの地をつかさどる又公卿乃きらへんともがら
廷乃ことをよりうやまふところ乃ものといへる士を
あやせ山とはくら給ふ事これ人の君として臣
下をはづかしむるハそのみちにあらず
されを明帝はくるしかりけると給ひていさめく
けれどもおりしにちやく崩御ましくて又清らかなる
をゆゆりやうさ代づくれお子をちかりぞへり故に魏の
天下はあまね司馬懿ふうばいとられまうのゆうく孫
のそつうりのふ義仲又土山のりくあそびをなして
されハこれぞあやそや

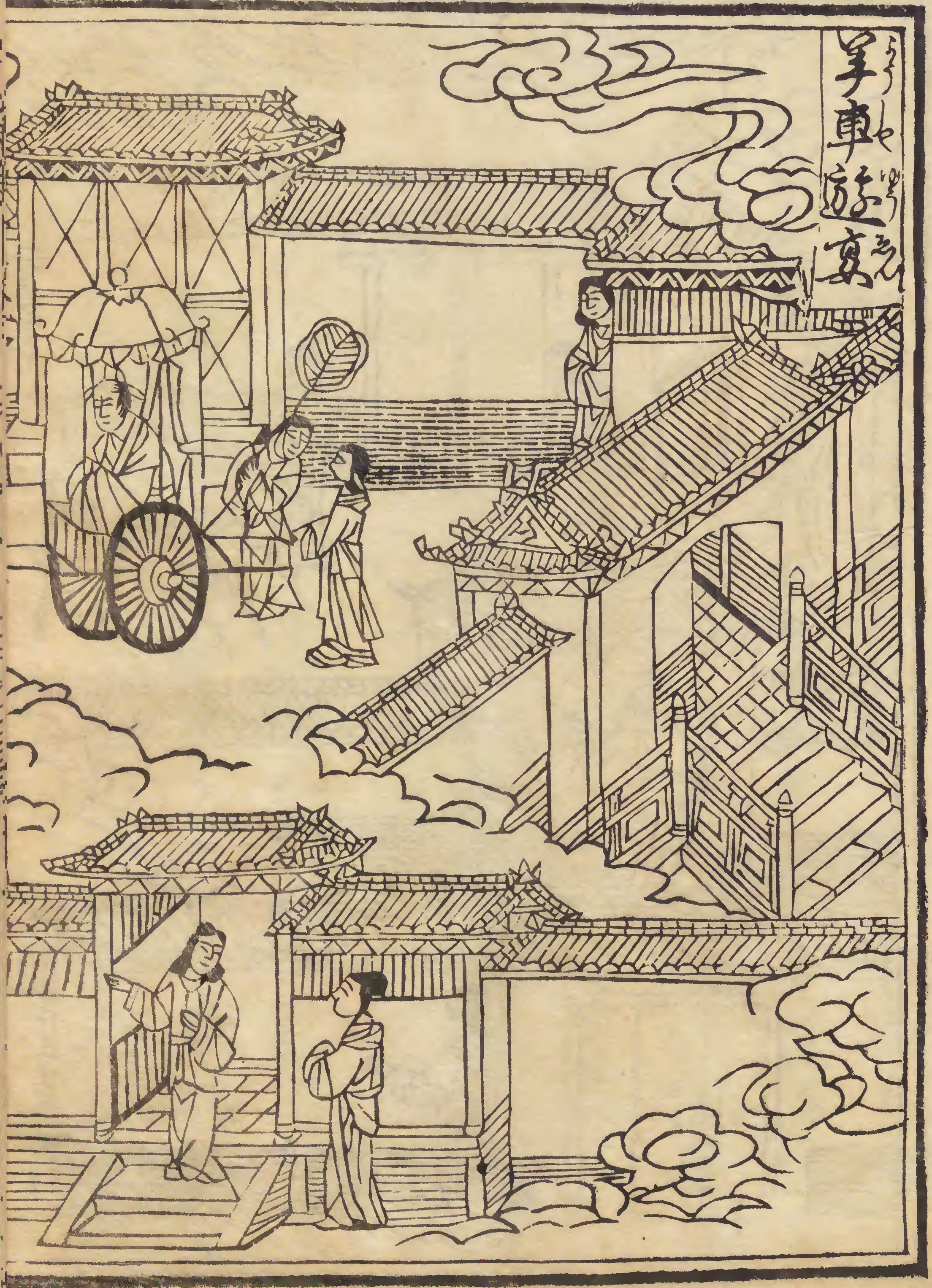
芳林営建

羊車遊宴

晋の武帝と申てみかど一人御座ましけるが呉國のてき
をいちなされてより世にもおぼしめされ給ひ
ゆゑに天下一とうにをさまり御世太平におさまり
ぬる後武帝は色の道を好み給ひとおぼしめされける
おひさしげなる女ぼうしひまくしてあけくれゆう
らんをこのみさんをすゝめしきりに天下の
まつりごとも御ゆるくなりて後宮に
一万人のきさきありかほよきをてうあいし給へ
たちあそびのうちにあそびかゝるあいし給へども
こゝろのかげさかりきれきさきの御かたへう

はゆきをせさせ給ふにたださとれむ乃うちよりいかなかた
こなるをおもひしそのはなにさきまでなにがしあたり
くらまふにめさまそひはじにこれをひら給ひつゞ
孫を見ぐるましくてかの羊(ひつじ)はゆきさまでまうし
而れ御はじめ孫にいたりせ給ひてなにかちしもさんを
りよそしはずゆうらんましくてたのしみ給ふて
うたりなりしものゆへありきさりになら君乃みゆるみ代
みうま給たまひておわひて竹(たけ)の葉をとりはれ戸の
かとりにさし又ハ塩ばかりて竹乃葉をもち羊(ひつじ)を
渡孫きさふもありけるひたしかにげ地乃あ南はず
孫乃おとりにそくぎりく身もじれきうろをまつら

給へりさるゆへ羊(ひつじ)ハ竹(たけ)乃葉と塩のこのミしれバそこの
むかしのためにいかんやうしてもいりしをまゐらせ君
乃車(くるま)をとゞめ奉てうなひをえんがためとりや武帝(てい)
ハたうふのりんちんにおごり給ふゆへ國家(こく)乃政事(せいじ)
をおさめ奉りけてあらくに楽(らく)一乃はまけれのちくに
楊駿(やうしゆん)とやしありちうの御よ楊駿これがうら朝廷(てうてい)乃らん
為ハをとり天下乃まつりごとを我ひとりはからひ
ひとりいせひうりおごりぬまで肉(にく)外(ぐわい)のくわくをこゝろ
楊駿よおかれバこそかうまつり枝(たくはへ)よ朝廷(てうてい)れまつり
みくも汲泉(り)く小ごとれあるのみやをとゞうかゞり
せうや又武(ぶ)帝(てい)れ太子(たい)小惠帝(けい)とやせしありしの連書


羊車遊宴

恵帝ぶかう丹海しますけ極へ忽びも国よりむかんせ
らして五胡乃乱おこりけくはおりハミやあのわさ
はひとゞありけるりはりくおとんミれど武帝
そゞ晩昊玉をゑいらげすひてよりよくそのこう孫
なけくしミまうりむとをゑぐしゑおこゑひまし悔
さぞてんりいよくおきまりて聡明乃ことゝあな
がま述孫ふ陀しさいなくしてあまつ後へ揚駿ゞてき
乃孫いぎんとゝらせて政をとらうて敗孫ふ極へ天
下にらんおきおこ始るあとゝりどもうるふゑえ乃り

宋祖倹徳

宋の劉裕とて門一人あらしまろかりとより栄花
をきはめ世を治めて先祖のさそおこり通し宮殿を諫よ
られいやしきをそおもしにせまきをあらそひ給ひて
足おかちあつかさり旧殿をいとあさ京方の垣壁柱
などふかくこ備まで飾をとりのぞくみうちもへすり
くだり給ひそりなば高祖のとぬりまぬ海なきにふし
清殿をぞいつり劉裕の時よりいそがてつづけて懐室と
いつり給ふにもの懐室みたる高祖の清服ををさめて
あき給ふおろとぞ劉裕此懐室をうかがちて玉燭殿を
ばくら壊たまりんとありしめ給し乃所下

めしつかひんしけるにはゆきなされて見給へど康の
むかしよりいの一けのつちどありみかきれかいふりも
一けの灯籠をかけておけるさい刻葛布をとりてさを
されまたかさねてみて蠅払をかけてとく紵麻のお
なりけるをめりかあらに高祖のとこゆかしよろづの
かけさとのまてもすこしをかざり給へまさぞ奢なよ
あれなどやぐめて後の子孫よりしめしていましめを
これ給へりあくに表顕とやしきんかありけよし俄
見んかよりもる祖乃みけきよらかざり給をみ堂をかめ
たてまつりなりし列後のかざりをいましむ列後此
よしをさらしめし笑く後給ひてあり後乃かりへそれ

高祖ハいやしき豪人にて法度ありけれバかなしきとき
天子のくらゐにのぼりよそなかりけり給り後漢位とりとく
御しま後ども、いかしきとこのおこりをたもちしを
ともされおし後さぞおかりへ、されど灯籠蠅払などもる
祖のぶんかハもとりもうりならいましめとかくらゐと
あるし、そうにおもりん事いも達那しとぞおなか後
なう後よくらゐにはりせ給ひてよりいまだ一氣も
まだかりしに玉燭殿のうちにしてはなふむなしを
あり給ふ其の法子よ子業とかせしかりくらゐあり
はか後まふといゝども、あくぎやくぶたうにあし
またゆへなちまち天下をうばわれて位をうしなひ

奢ひろりされ天下の君たる人もついにおごり
侈しま彼バまざりし志そんするにおよぶ事あるべ
りけくけくしむべし

帝鑑圖説巻第十終

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan